住井すゑとその文学の里（六十六）

ー牛久沼のほとりー

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

住井すゑの長編小説『向い風』-劇団文化座が公演-

長編小説『向い風』
-劇団文化座が昭和40年に初演-

住井すゑの書き下ろしの長編小説数多くある中で、昭和33年（1958年）6月に講談社より刊行された『向い風』が、劇団文化座で昭和40年（1965年）の7月3日より14日まで、港区赤坂の都市センターホールにおいて初演されている。

『向い風』は、敗戦（昭和20年・1945年8月15日）間もない農村が主たる舞台。出征（軍隊の一員として戦地に行くこと）していった、農家の若い跡継ぎ（その家の跡を継ぐ人）の復員が遅れる一方で、農地解放が進む、そうした混乱の中で、〝留守を守る主婦のたくましい生き方〟がストーリー。

住井の長女かほるの話によれば、『向い風』公演の舞台衣装である野良着（のらぎ）は、住井が近所（牛久沼のほとりの純農村・城中）で調達したという。

『向い風』公演シーン。左から佐々木愛、鈴木光枝、森居利昭。昭和50年に再演があり、全国巡演された。同年7月5日には土浦市民会館でも公演があり、住井すゑも観劇している。

劇団文化座は、佐佐木隆・鈴木光枝夫妻が主宰

文化座は、井上正夫演劇道場のメンバーであった演出家の佐佐木隆、女優の鈴木光枝らによって昭和17年（1942年）2月に結成され、同年4月に梅本重信作『武蔵野』で旗揚げをする。昭和20年（1945年）、日本の現代演劇を紹介する目的で満州（現中国東北部）に渡り、そこで敗戦を迎え、1年余、難民生活を送る。ここでの体験は大きく、「戦争と人間」というテーマがその後の劇団の主柱になった。劇団の信条「地から湧く演劇」を掲げて、底辺に生きる人々に光を当てた作品の上演を続けてきて、来年は創立70周年の節目を迎える。

昭和62年（1987年）より佐々木愛が劇団代表に就任している。

創立より座の象徴的な存在であった鈴木光枝を平成19年（2007年）5月に失ったが、現代表の佐々木愛を中心に、近年は中堅若手劇団員の成長も著しく、定評のあるアンサンブルには益々磨きがかかっている。

平成20年（2008年）10月に上演した『てけれっつのぱ（蜂谷涼原作）』が同年の文化庁芸術祭大賞を受賞、同22年（2010年）より全国巡演を開始して、トルコ国でも公演している。

近作には、『こんにちは、おばあちゃん』、『王子の狐かぎをくはえて』、『銀の滴降るまわりに』、『骸骨ビルの庭』など多彩なラインナップを誇っている。

住井すゑと佐々木愛の対談集より抜粋

昭和63年（1988年）に文化座の機関誌上で行われた住井と佐々木の対談集〝愛　夢ばなし（教育史料出版会刊）〟に収録されている佐々木の話の一部分を抜粋して次に記してみた。

佐々木　またある彫刻家との話で、牛久の地名や住井先生の名前が出ましたら、若いのにどうしてあなたは住井すゑなんて名前を知っているのかといわれました。だって私は住井先生が好きだし尊敬しているからと答えると、自分もそうだ、あの人が牛久沼のほとりにいることが、創作の源になっているんだというんですね。遠く離れたいろんなところから先生のいらっしゃる牛久に熱い思いが向けられているんです。仕事がつらいと思い悩んでいた私が、たまたま先生の『大文豪ならいざしらず…』の文章に出あって励まされたりしたみたいに、私の場合も微力ですけれども、何かに行き詰まっている人が私たちのお芝居を観て元気が出たとか、ふっと目からうろこが落ちるみたいなことがあったら嬉しいなと。

劇団文化座代表
佐々木愛近影

※劇団文化座のプロフィール等の掲載に際しては代表の佐々木愛さんをはじめスタッフの方々の協力をいただいたことを特に記しておく。

劇団文化座創立70周年記念
～田端アトリエ連続公演～

10月13日（木）～23日（日）
「獅子」
作／三好十郎　演出／原田一樹
出演／有賀ひろみ　青木和宣
小林悠記子　ほか
10月28日（金）～11月6日（日）
田端文化座アトリエ、新潟高橋竹山邸ほか
【特別企画】
佐々木愛・高橋竹山によるふたり旅
「越後つついし親不知」
作／水上勉　構成・演出／金大偉

※文中の敬称は省略します。

※「住井すゑとその文学の里」は完結しました。広報うしく9月1日号（正岡子規と牛久沼）からは、うしくの歴史全般にわたって掲載します。